

一、次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

小学校低学年の「僕」、坏歩（あくつあゆむ）は、エジプトの日本人学校に通っている。その近くの小学校に通うエジプト人の子どもたちは、登下校の時間に合わせて日本人学校にやってきて、スクールバスをたたいたり、指をさして笑ったりして、日本人の子どもたちをからかっていた。

僕のクラスメイトは、同じように窓を叩いて反撃していた。向井さんなどは、引つ張られた手を振り回し、口汚くののしたりもした。僕らは彼らのことを「エジツ子」と呼んでいた。低学年のおよそ全員が、エジツ子に対して臨戦態勢だった。だが僕には、それが出来なかった。そんなことをしたら、かえって向こうの興奮を煽るだけだと思っていたし、実際そうだった。皆が反撃すればするほど、エジツ子たちは僕らをはやしたて、大声を出すのだ。

大人びた高学年ともなると、さすがに僕の同級生のように幼いことはしなかった。だが、対応として、積極的な解決策は見つかっていないようだった。僕が観察している限り、何人かは、彼らに向かって中指を立てたり、日本語でからかい返したりしていたが、大抵の生徒は、「とにかく無視をする」ということに決めていた。

<sup>1</sup> 僕は何度も、大人たちが注意してくれればいいのに、そう思った。大人といっても、教師だけではなかった。バスのドライバーさんや添乗員さんと呼ばれるエジプシャンもいた。でも彼らは皆、子供たちの狼籍を取り立てて叱らず、対応を僕ら子供たちに任せているようなところがあった。

今思えば、大人たちも困っていたのではないだろうか。人懐こいエジプシャンのすることだ、しかも子供たちの関係に、大人が口を出すべきではないと、思っていたのではないか。もしかしたら、現地の子と触れ合う良い機会になるかもしれないし、それにもかかわらず、先生は現地の子供たちを叱ることが出来なかったのだ。現地の学校の先生との関係があったのかもしれないし、そもそもエジプトに住んでいる日本人として、なんらか思うところがあったのかもしれない。教育者としての矜持かもしれないし、個人としての思いもあったのだろう。

でもとにかく、あからさまに現地の子供たちを叱ることが出来ない、ということに関して、皆の意見は一致しているよう

だった。エジツ子たちには、信じられないくらいの人懐っこさがあったが、こと教育者にとっては、<sup>2</sup> 日本にいるとき以上の「よそさまの子」感もあったのだ。

ドライバーや添乗員はエジプシャンだったから、学校の先生たちよりは、現地の子に接しやすはずだった。現にドライバーは、エジツ子がバスの横腹を叩くと、窓を開けて怒鳴っていたし、添乗員も子供たちに何か話しかけられたら、少し荒っぽいアラビア語で答えていた。だが彼らも、結局は日本人学校に雇われている身だった。何かややこしいことを起こすよりは、静観しておいたほうがいいと思っていたのだろう。当時日本人学校は、エジプシャンにとって好条件の職場だった。だから彼らは、取り立てて僕らの助けにはなってくれなかった。日本人学校の教育方針と同じく、決定権はおおむね、僕たちに委ねられていたのだ。

前述したように、同級生のほとんどが反撃に転じていたが、僕には出来なかった。生まれ落ちた瞬間から、身近にいた人間が常に臨戦態勢だったこと、<sup>3</sup> 同じ轍を踏むまいと、いつだって事を荒立てないように生きてきたことが、僕の行動を完璧に制御していることは確かだったが、それ以上にエジツ子と接することが、僕にはどうしても難しかった。

とりあえず、高学年の態度と同じように、僕は無視を決めこんだ。言葉は分からないが、おそらく彼らは悪意のあるなしにかかわらず、僕らをからかっている。真摯な質問や挨拶で無い限り、それは無視してもいいはずだ、許されるはずだ。僕が怖がったのは、もちろん自分が傷つくことだったが、それ以上に、彼らの気持ちを害することだった。

それは、僕の優しさからくるものではなかった。どうしてか僕は、エジツ子を傷つけてはいけない、出来ることなら仲良くやれたらいいが、それが適わらないなら、少なくとも狼籍を働いてはいけない、そう思っていたのだ。

だが、エジツ子たちはまだ良かった。問題は、道にいる子供たちだった。つまり、学校に行けないような子供たちだ。

僕たちと同じ年くらいの子もいれば、ヨチヨチ歩きの子もいたし、髭が生えてきている子もいた。皆、大きすぎる汚いシングル、もしくは裸足で道を歩き、空き地に捨てられたゴミを棒で漁ったり、どこで得たのか、エジプトのお菓子を折り合ったりしていた。そして僕たちが学校から出てくると、何かしら叫びながら、わらわらと集まってくるのだった。

大人たちは、「彼ら」に対しては、さすがに声を荒らげていた。「彼ら」は汚かったし、すぐくにおったし、とても乱暴

だった。

同級生たちは「彼ら」がやってくると、「くさい！」と鼻をつまんだ。慌ててバスに乗り込んだり、学校に逃げ込んだりした。エジツ子たちとは比べ物にならない危機感があった。エジツ子たちすらも、「彼ら」を恐れ、嫌悪していた。「彼ら」がやって来たときは、僕らとエジツ子の間で、なんとなく仲間のよう<sup>4</sup>な、妙な連帯感が生まれさせた。

僕は、「彼ら」に対して、自分のスタンスをどうしても決めきれないでいた。エジツ子たちは無視すると決めたが、「彼ら」に大声で話しかけられると、どうしても無視しきれなかったし、無視出来たとしても、バスに乗り込むときに、胸がキリキリと痛むのだ。その胸の痛みに耐え切れず、曖昧に笑ってしまうことが、僕にはよくあった。

僕が笑うと、「彼ら」の何人かは笑い返してくれた。その笑顔を見ると、僕の胸は驚くほど暗れたが、それをきっかけに、「彼ら」が積極的に僕と関わろうとしてくると、僕は恐怖と、なんともいえない嫌な気持ちで体がすくんだ。そんな風になるのが分かっているのだから、わざわざ笑いかけたりしなければいいのに、それでも「彼ら」を見ると、僕はどうしても笑ってしまうのだった。

僕その態度を、向井さんはめざとく見つけていた。

「坏さんはどうして笑うんだ、あいつらは敵だぞ。」

でも僕は、もし「彼ら」が敵であっても、いや、敵であればあるだけ、卑屈に笑いかけてしまうのだった。僕は何もされていなく、うちから腹を出してしまう、弱虫の犬みたいなものだった。

でも僕は、まだその時点では、<sup>5</sup>そういう自分を愛していた。優しさからくるものではないとしても、エジプシヤンの子たちと喧嘩をするいわれはまったくなかったし、人に笑いかけることを悪だとする価値観はないはずだった。特に、「彼ら」のような子供たちには。

だが、ある日、自分のこのやり方を、徹底的に恥じるきっかけになる出来事が起こった。

僕は母と、買い物に出かけていた。

7月26日通り沿いには、たくさんのお店があった。母が初期の頃、頭つきの鶏を買ったのも、この通りだった。

母が入った洋服屋は、奥に長いのに窓がなく、薄暗い店だった。商品も少なく、見る限り、スカートは同じデザインのもの

のが何着も並べられ、商品棚はぼつぼつと穴が空いているようだった。それでも母は、自分の気にいるものを探すのがうまかった。少ない商品の中から、茶色くて太い革のベルトを探し出した。店の袋には、古代エジプトの女王、ネフェルティティの顔が印刷されていた。

店を出たときだった。僕たちの周りを、エジプシヤンの子供たち数人が取り囲んだ。

見る前から、おおいで分かった。「学校に行っていない子供たち」、つまり「彼ら」のおいだった。僕は、母の少し後ろにいた。母越しに見た子供たちは5人いて、どの子も僕より少し大きかった。皆、垢じみた大きすぎる服を着て、3人は裸足で、残りのふたりは大人用のサンダルを履いていた。

気がついたら、卑屈に微笑んでいた。

一瞬で恐怖に包まれた僕に、出来ることはそれしかなかったのだ。

「彼ら」が、僕らに興味を持ってしまったこと、そして僕らに何らか接触しようとしていること、そして「彼ら」が、僕と圧倒的に違うこと、それが怖かった。

「汚い、あっち行き！」

そのとき、母の声がした。

<sup>6</sup>突然のことで、僕は一瞬、母が何を言っているのか分からなかった。はじかれるように母を見上げると、母は犬にするように手を振って、「彼ら」を追っ払っていた。

胸を、強い力で押されたような気がした。

「あっち行き！」

「彼ら」は、それでもめげなかった。母に笑顔を向け、僕の腕を取ろうとした。びっくりと体を震わせた僕と違って、母はその腕を強く払った。

「触るな！」

こんな好戦的な母を、僕は見たことがなかった。

母の剣幕に気おされたのか、「彼ら」は僕らから離れた。

僕の心臓は、どきどきと高鳴っていた。僕を襲った衝撃は、僕から全く去らなかつた。

「彼ら」は、少し離れて、僕たちについて来ていた。母は僕の手を引く張って、足早に歩いた。そして、「彼ら」がついて来ているのが分かると、振り返って、

「ついて来るな！」

だめ押しで、そう叫んだ。

「彼ら」は、僕のように卑屈に、ニヤニヤと笑っていた。僕はその笑顔を見るのが嫌だつた。唾を吐きかけられたほうが、まだましだつた。でもそんなことをしたら、母がどんなに怒るか、僕には想像も出来なかつた。僕はちらちらと、「彼ら」を振り返つた。

「彼ら」の中に、ひとりだけ笑っていない子供がいた。5人の中で、一番小さな男の子だつた。

僕はその子と目が合うと、咄嗟に笑ってしまった。

母に手を引かれながら、必死で笑顔を作つたのだつた。それは、僕なりの「ごめんさい」なのかもしれないし、そうではないのかもしれない。ただ分かっていたのは、僕の写真が、今まで作つたどの笑顔よりも、卑屈なものだということだつた。

その子は、僕に向かって唾を吐いた。

白い泡が、べしゃつと、地面を汚した。

ニヤニヤと笑っている男の子たちの中、その子だけが、怒りに燃えていた。

僕はショックを受けた。数秒前は、「唾を吐きかけてくれた方がまし」、そう思っていたのに、実際そうされたときのショックは、計り知れなかつた。地面に吐かれた白い唾は、僕を直接汚すよりも強く、僕を傷つけたのだ。

母のやつたことは間違っている。それは確かだ。

だが僕は、母のやつたことに、ほとんど感動すら覚えていた。

僕だつて、本当はそう思っていた。「汚い」と。「触るな」と。でも、僕は、「そんなこと、決して思つてはいけない」と思っていた。誰に教わつたわけでもないのに、僕はエジプシャンの子を、とりわけ学校に行くことが出来ない、物乞い同然の生活を送っている「彼ら」を、決して見下してはいけないと思つていた。

あなたたちに対して悪意はない、あなたたちのことを見下してはいない、そう言えない代わりに、僕は笑つていた。そして「彼ら」が、僕の笑顔に喜んで近づいてくると、恐怖で震えた。心の中で「こっちへ来るな」、そう叫んでいた。

僕に唾を吐いたあの子は、僕の笑いの意味に、気づいていたのだ。

僕が結局、彼らを下に見ていたことに。

扱いは、僕たちとはレベルの違う人間だと、認識していたことに。

母のやり方は絶対に間違つていたが、間違つている分、真実だつた。己を貶める行為をすることで、母は彼らと同じ地平に立っていた。「そんなこと、してはいけないことだ」「人間として下劣だ」、そう糾弾されるやり方で、母は叫んだ。

でも僕は、安全な場所で、誰にも石を投げられない場所で笑顔を作り、しかし圧倒的に彼らを見下していたのだ。母よりも、深いところで。

僕は自分がしていたことが、恥ずかしくて仕方がなかつた。一度そう思うと、父のおかげで大きな家に住んでいること、学校に通っていること、すべてのことが恥ずかしく思えてきた。

僕と「彼ら」とに、どのような違いがあるのだろう。

どのような違いが、この現実を生んでいるのだろう。

カイロにいる間、母の無邪気さ、素直さは、ずっと変わることがなかつたが、僕が「彼ら」に対して思う、この後ろめたさ、羞恥心も、決して消えることはなかつた。

11 僕は毎日、「彼ら」に会わないことを祈つた。そしてその祈りは、絶対に叶えられなかつた。僕は毎日、誰かしらの「彼ら」に会い、そのたび卑屈に笑い続けたのだつた。

(西加奈子『サラバ!』)

問一——線部1「僕は何度も、大人たちが注意してくればいいのに、そう思った」とあるが、それはなぜか。その理由として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分たち子どもがエジツ子たちの被害から身を守るためには、常に臨戦態勢でいる必要があったが、「僕」にはそれができなかったから。

イ 自分たち子どもでは、エジツ子たちに対して無視をする程度の消極的な対応策しか見つからず、ほかにどうすることもできなかったから。

ウ 自分たち子どもでは、エジツ子たちに対して臨戦態勢でのぞむ以外に有効な手だては見つからず、どうしようもなかったから。

エ 自分たち子どもがエジツ子たちの被害を受けるのは大人たちのせいなので、大人がきちんと責任をもって対策すべきだと思っっているから。

問二——線部2「日本にいるとき以上の『よそさまの子』感もあったのだ」とあるが、どういうことか。次の中から適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 日本でも自分に関係ない家の子供のことをわざわざ気にかけてはしないものだが、エジプトでも現地の子供に対してはまったく無関心であったように見えたということ。

イ 日本でも他の土地からひっこしてきた時には、周りに何かと気をつかうものだが、エジプトでもよそから来た者として、現地の子供たちに対して色々と気をつかっていたように見えたということ。

ウ 日本でも自分の家の子供よりも他の家の子供を大切にすべきだという考え方があがるが、エジプトでも日本にいるとき以上に現地の子供を大切にあっていったように見えたということ。

エ 日本でも自分の身内以外の子供に対しては、どこか遠慮がちに接することがあがるが、エジプトでも現地の子供との接し方にはよりいっそう気をつかっていたように見えたということ。

問三——線部3「同じ轍を踏むまい」とあるが、この語句の意味を説明したものとして適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。なお「轍」は「車の車輪の跡」のことである。

ア 他人が過去におちいった失敗を自分もしたくないということ。

イ 工夫もなくただ他人のまねをすることはしたくないということ。

ウ 他人が過去におかした失敗から何かを学びとりたいということ。

エ 自分自身が過去におかした失敗をくりかえしたくないということ。

問四——線部4「妙な連帯感」とあるが、なぜ「妙」なのか。その理由として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア エジツ子たちが国籍の同じ「彼ら」を敵とし、国籍の異なる僕らを仲間としているから。

イ 僕らとエジツ子たちが、ふだんは敵対しているのに、ここでは団結しているから。

ウ 僕にはできない「彼ら」と敵対するという態度を通して、連帯感が生まれているから。

エ 言葉が通じず分かり合えるはずのないエジツ子たちと、心が通じ合っているから。

問五 ——線部5「そういう自分を愛していた」とあるが、どういうことか。次の中から適当なもの一つ選び、記号で答えなさい。

ア 同級生たちが敵として嫌っている「彼ら」に対しても、笑顔を向けることのできる自分は、誰とでも分け隔てなく接することのできる優しい人物なのだと、自分を肯定している。

イ 学校に行けないエジプシヤンの子供たちに話しかけられた時に、ただ笑顔を向けるだけならば、「彼ら」を傷つけているわけではないのだから、それは悪いことではないと、自分を肯定している。

ウ できるだけ事を荒立てないように生きてきた自分の性格は今さら変えられないのだから、「彼ら」に笑いかけることしかできないとしても、それはしかたがないことなのだと、自分を肯定している。

エ 学校に行けずにいる「彼ら」とできるだけ関わらないようにしていることは、確かに弱虫と言えるが、何か危害を与えているわけではないのだから責められることでもない、自分を肯定している。

問六 ——線部6「突然のことで、僕は一瞬、母が何を言っているのか分からなかった」とあるが、それはなぜか。その理由として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア いつもの母からは想像できないような攻撃的な言葉が出てきたので、その言葉の強さとふだんの母が頭の中ですぐには結びつかなかったから。

イ 「彼ら」のことを注意する大人が出てきてほしいと思っていたところ、思わぬところから理想の大人が出てきて驚いてしまったから。

ウ 囲まれている状況であるにもかかわらず母が急に「彼ら」を挑発しはじめたので、その言葉の真意が分からず混乱してしまっただけから。

エ 母が汚らしい言葉で突然「彼ら」をのしつたせいで、怒りにかられた「彼ら」がおそいかかってくるのではないかと恐ろしくなったから。

問七 ——線部7「唾を吐きかけられたほうが、まだ良かった」とあるが、この時の「僕」の気持ちはどのようなものか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 母は「彼ら」に対して好戦的な姿勢をとっているのに、「彼ら」がそれになかなか心配しようとはしないので、自分はこの後「彼ら」に対してどのようにふるまって良いのか分からないと思っている。

イ 卑屈にニヤニヤと笑って母の発言を受け流そうとするのではなく、そこで感じた怒りを直接表現してくれなくては、母が「彼ら」に言いたかったことがきちんと伝わったかどうか分からないと思っている。

ウ 「彼ら」の卑屈な笑顔を見ると、自分がいつも笑顔の裏に本心を隠していることを見透かされているような気がするが、「彼ら」から唾を吐きかけられればそんな思いも消えると思っている。

エ 自分のように笑顔の裏に気持ちを隠すのではなく、「彼ら」が母のひどい言い方に見合うだけのことを自分にしてくれたほうが、「彼ら」に対して後ろめたさを感じなくてすむと思っている。

問八 ——線部8「今まで作ったどの笑顔よりも、卑屈なものだということだった」とあるが、なぜ「どの笑顔よりも、卑屈」だったのか。その理由として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 敵であればあるほど卑屈に笑いかけてしまうことの多い自分の前に、「彼ら」が明確な悪意をもったいかにも敵らしい敵として立ちほだかってきたから。

イ 言いたいことを代わりに言ってもらっている自分が、常に母に守られた存在であることを知り、頼れる親のいない「彼ら」に引け目を感じるようになったから。

ウ 母が「彼ら」をはつきりと見下すような言葉をはいた後だけに、自分は「彼ら」をおとしめるつもりはないのだということを強く示す必要があったから。

エ 自分が向けた笑顔に対して笑い返してくれなかったので、自分は「彼ら」を見下すような気持ちはないのだと再び伝えなくてはならないと思ったから。

問九 ——線部 9 「地面に吐かれた」僕を傷つけたのだ」とあるが、「僕」が「傷つ」いたのは、「僕」がどういう自分に気がついたからか。「」自分に気がついたから。」に続く形になるように、六〇字以上、八〇字以内で答えなさい。

問十 ——線部 10 「だが僕は、母のやったことに、ほとんど感動すら覚えていた」とあるが、それはなぜか。その理由として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「彼ら」のことを以前から「汚い」から触ってほしくないと思っていた自分の本音にこのとき初めて気づかされ、そのことで自分がどういう人間であるかをはっきりと示してくれたから。

イ 安全な場所において自分が傷つかないような遠回しな言い方で逃げるのではなく、あくまでも本音でぶつかることが大事なんだと、自分に模範もはんを示してくれたことがうれしかったから。

ウ 今まで「彼ら」やエジっ子たちに言いたかった自分の本音を、母が自分のことを守りながら代弁するような形ではつきりと相手にぶつけてくれたことにすがすがしきを感じたから。

エ 人間として下劣だと相手から言われかねない差別的な言葉を相手にぶつけることで、「彼ら」ときれいごとでなく対等にやりあおうとしている母の姿勢がいさぎよかったから。

問十一 ——線部 11 「僕は毎日、『彼ら』に会わないことを祈った」とあるが、それはなぜか。その理由として適当なものを

次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「彼ら」に会うことで、父のおかげで何ひとつ不自由のない生活をしている自分が見下されてしまう気がするし、見下されながらも、「彼ら」に笑いかけることしかできない自分の弱さに直面することになるから。

イ 「彼ら」に会うたびごとに、「彼ら」に対してより強く後ろめたさを感じるようになるし、そんな後ろめたさを感じながらも、「彼ら」に向かって笑い続ける自分を、みんなに見られることになるから。

ウ 「彼ら」に会うと、自分が感じた恥ずかしさを思い出すことになるし、自分の笑いの意味を理解しながら、それでも笑うしかないことで、よりいっそう自分の卑屈さを思い知らされることになるから。

エ 「彼ら」に会うたびに、どんなに自分が努力したとしても、「彼ら」とは仲良くできないことが分かってしまうし、事を荒立てないように生きてきた自分の卑屈さは変えられないと痛感することになるから。

二、次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

私たちの多くは、おそらく学校という場所ではじめて、「私」を分裂させるのではないか。家で、好き勝手に過ごしているままではいられない。親と接するのとはべつな方法で、先生や友だちと接しなければならぬ。年齢があがるにつれて人間関係はどんどんシンプルではなくなり、それにシタガ<sup>a</sup>って私たちはべつの顔を用意しなければならなくなる。私もそうだった。b シュンキのころ、暗いこと、ネガティブなことばかり考えるようになったけれど、学校では明るく振る舞っていた。そうしながら、他人の顔の使い分けに気づくと、ものすごくいやなものを見た気になった。私は学校のほとんどすべての教師が嫌いだったが、おそらく彼らの二つの顔を見たせいだろう。覚えているのはそんなエピソードばかりだからだ。発展途上国の子どもたちへの寄付を呼びかける教師が、毛皮のコートを自慢しているのを見たり、正直であることがいちばんのビトク<sup>c</sup>のように説く教師が、自分の手抜きを隠すための嘘をついているのに気づいたり、今考えれば、そんなことくらいどうだっていいじゃないかと思うようなささいなことで、私はその教師を嫌いになっていた。自分が顔を使い分けていることを自覚していて、そのことに嫌悪を感じていたのだろう。

私に通っていたのは女子校で、大学生になって久方ぶりに同世代の男子と近しく接するようになった。同世代の男子とかわりがあったのは小学校のときが最後だったので、声交わりをし、すっかり大人びた体の大きな彼らに私はひどく緊張し、その緊張を必死に隠して接していた。するとあるとき友人から、指摘を受けたのである。あなたは男の子にたいするときはなんだか感じが違うわね、と。それはおそらく、緊張を隠したために、何かが過剰<sup>d</sup>だったのだろうと思うのだが、異性に媚びている、と彼女は言いたいのだった。その言外の意味を理解した私は消え入りた<sup>e</sup>いほど恥ずかしかった。媚びているつもりはまったくなかったのだが、二度とそのように思われてはなるまいと、意識して慎重に男子と接するようになった。

けれど社会に出て、年齢を重ねていくと、顔の使い分けにたいするかつてのような潔癖な嫌悪はなくなった。と、いうよりも、むしろ使い分けなければ日々を過ごすのがたいへんである。趣味の友だちとは趣味の話をし、飲み友だちとは飲む場においてシウシ<sup>d</sup>する話で盛り上がり、仕事相手とは仕事の話を<sup>e</sup>する。どれが表も裏もなく、まあ、違う顔、という程度ではあるが、ごく自然に使い分けて過ごしている。むしろ、混同しないように私は気をつけている。仕事相手と酒を飲んで話

すうち、プライベートな相談を持ちかけてしまいに泣き出すような失態はすまい、と心に決めているし、不機嫌なときそれを<sup>f</sup>見せていい相手、いけない相手、というようになこともわきまえている。顔の使い分けは礼儀でもある。

5 美容院で渡された雑誌を見ていて、もしかして女性は、そのような使い分けを世のなかからやんわりと強要されているのかしらん、と、思ったことがある。その雑誌は三十代の母親向けの雑誌だったのだが、妻と母と女、それぞれのファッションの提案がなされていた。家族や、お子さんと出かけるときはこんな格好で。夫と二人で出かけるときはこんなお洒落<sup>g</sup>の使い分け奨励<sup>h</sup>でもあるように見える。たしかに女性が、「母親ではあるが、ひとりの女性でもありたい」というようなことを言っているのを耳にしたことが、一度ならずあるが、あれは、自主的に言っているのか、それとも、社会的風潮に言わされているのか、どちらなのだろう。

けれど自分の母親の世代を振り返ってみれば、彼女たちが三十代のころに「母でもあるがひとりの女でもある」などと言えたはずがないのだから、そんなふうに見えるほど、女性たちは以前より、選択肢が増えたのだと思う。働くことも、母になることも、ならないことも、妻になることもならないことも、選んで、なおかつ、選んだことを主張できるのだな、と。ところで、男性雑誌は見ないから知らないかもしれないが、夫、父、男、と異なるファッションを男性が提唱されるのはあまりないように思う。せいぜい雑誌の<sup>i</sup>っているのは、仕事とそうでない日の服の着分けくらいではないか。

「A」ではあるが、ひとりの「B」でもありたい」などと言っている男性は見たことがなく、ときたまそんなせりふを聞くと、たんなる浮気の言い訳だったりする。

7 子育てや家事を積極的にする男性が増えたとはいえ、やはり、外界の他者と接するのは、女性が圧倒的に多いのだと思う。働いていけば会社の人と顔を合わせるのは男性も同じだが、近所の方々、学校の先生や子どもの友だち、その保護者、商店やタクハイ業者と話すの<sup>j</sup>だつて、女性のほうが多いのではないか。会社の重役だった男性が、退職したものの、近所の集い<sup>k</sup>に入れないという話をよく聞く。いざ入っても、かつての癖<sup>l</sup>や偉そうな態度をとってしまい、敬遠されるという。こういう人は、社会貢献はしてきたが、一般社会と本当の意味で接してはこなかったのだろう。顔を使い分ける必要性を学んでこなかったのだろう。

そのような日常的な顔の使い分けとは異なって、はっきり「裏」と「表」があると感じたとき、やはり人はさほど寛容ではない。<sup>8</sup> 嫌悪というより、恐怖のゆえだろう。

ずっと前のことだが、私の前を、携帯電話で話しながら、犬の散歩をしている女の子が歩いていったことがあった。二十歳くらいの子で、恋人と話しているらしく、甘えた声でたのしげに話している。その子は、うしろを歩く私に気づかなかつたのだろう、突然、リードの先の犬の脇腹を、ガツ、と蹴ったのである。にこにこ会話しながら。泣きそうになるほど、こわかった。まったく意味のわからないこわきである。犯罪のニュースで、加害者の周囲の人が口にする「そんなことをする人にはまったく見えなかった」人が、そんなことをする場に居合わせてしまった、という、理解を超えたこわき。

では、そうした二面性を理解できない自分自身の内には、表と裏、まったく相反する二つの性質などないのかといえば、そんなこともやっばりない。私は自分を常識的な人間だと思うが、他人から見たら非常識なことを平気でしているかもしれない。慈悲深さと残酷さが、正義と不義が、謙虚と傲慢が、みだらさと貞淑さが、何も対立することなく同居できるのが人の心だと思う。その相反する二面が自らの内にあるとは、私たち自身もたいいはいは自覚していない。

小説にかぎっていえば、私はそのような人物の登場する小説のほうが、好きだ。いい人はずっといい人で、悪い人は登場からすでに悪そう、という一面的な人ばかり出てくる小説は、ちょっと退屈してしまう。いい人でもあるが、でも悪い人でもあり、いや、そもそも、いい、悪いってなんだ？ と、つい考えてしまうような小説が好きである。現実には、笑いながら犬を蹴る女の子はこわすぎて直視できないが、小説ならば、その理解不能な心の奥底を、じつと見つめることができるからである。自分の知らない、自身の内の深い穴をのぞきこむように。

(角田光代『世界は終わりそうにない』)

問一 —— 線部 a i e のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 —— 線部 1 「私」を分裂させる」とあるが、どういうことか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア その人に対する好き嫌いによって自分の態度が変わってしまうということ。

イ たくさんの自分を演じることによって本当の自分を見失ってしまうということ。

ウ そのときどきの状況に合わせて相反する二つの顔を使い分けるということ。

エ 接する相手などに応じて自分の振る舞い方をさまざまに変化させるということ。

問三 —— 線部 2 「他人の顔の使い分けに気づくと、ものすごくいやなものを見た気になった」とあるが、その理由が述べられている一文をこの —— 線部がふくまれる段落の中から探し、最初の五字をぬき出して答えなさい。

問四 —— 線部 3 「その言外の意味を理解した私は消え入りたいたいほど恥ずかしかった」とあるが、それはなぜか。その理由として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分が緊張を隠すために顔を使い分けられていることに気づかれたばかりか、そうやって顔を使い分けることで男子への好意を示していた自分を批判されたから。

イ 男子と接する際に緊張していつもと違う顔を見せる自分に気づかれたばかりか、その緊張を態度に表すことを男子に媚びていると受け取られてしまったから。

ウ 顔を使い分けるといふ行為を自分がしていることに気づかれたばかりか、男子に気に入られるために顔を使い分けているのだと誤解されてしまったから。

エ 男子の前では顔の使い分けをしていることに気づかれたばかりか、自分が同年代の男子とかかわりあうことに慣れていないことを見破られてしまったから。

問五 ——線部4「顔の使い分けは礼儀でもある」とあるが、筆者がそのように考えるのはなぜか。その理由として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 社会に出て、年齢を重ねると、人間関係がより複雑になるため、顔を使い分けることで公私の区別をつけなければ、自分が周囲からの信頼を失うことになりかねないと思っているから。
- イ 顔の使い分けは社会で生きていく上で必要不可欠なものであるが、行きすぎた使い分けは相手から思わぬ怒りを買うこともあるため、かえって失礼にあたると思っているから。
- ウ 顔の使い分けは自分が日常生活を円滑に過ごす上で必要なものであるが、その場の雰囲気をお互いにこわさず、相手を不快にさせないようにする気づかいでもあると思っているから。
- エ いつでも本当の自分を相手に見せ続けることは理想ではあるが、顔を使い分けることで本音が表に出て来ないようにすることも、大人として当然必要なことだと思っているから。

問六 ——線部5「美容院で——いるのかしらん」とあるが、筆者がそのように思うのはなぜか。その理由として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 一緒に出かける相手や出かけていく場所に応じたお洒落を楽しんだらどうかと言っているようでいて、状況にあった服装を間違えずに選択しなさいと言われても見えるから。
- イ 妻と母と女、それぞれの立場に応じた服装をしたらどうかと言っているようでいて、自分がどの立場を選んだのかということをはっきりと主張できるように言われているように見えるから。
- ウ 服装を選ぶ時ぐらいいは、顔の使い分けをしなくてもよいのではないかと言っているようでいて、一緒に出かける相手や出かけていく場所に応じて適切な服装をしなさいと言われても見えるから。
- エ 母親ではなく、ひとりの女性としてお洒落を楽しんだらどうかと言っているようでいて、妻と母と女というすでに決められた選択肢の中から選びなさいと言われても見えるから。

問七 ——線部6「自主的に言っているのか、それとも、社会的風潮に言わされているのか、どちらなのだろう」とあるが、どういふことか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自ら積極的に母親という役割を捨て去り、ひとりの女性として生きることを選んでいるようでいて、そうしていこうという社会の風潮になんとなく乗っかっているだけなのではないかということ。
- イ 自らの意志でひとりの女性としての自分も大事にする生き方を選び取っているようでいて、そうあらねばならないという社会の風潮に生き方を選ばされているのではないかということ。
- ウ 自ら判断して母親としてだけでなくひとりの女性として生きることを主張しているようでいて、そうあつてはならないという社会の風潮にただ反発しているだけなのではないかということ。
- エ 自ら母親になってもひとりの女性でありたいと意欲的に主張しているようでいて、そうすべきであるという社会の風潮に気圧されてやむを得ず嘘をついているのではないかということ。

問八

A

B

に適当な言葉を補いなさい。ただし、

A

B

は漢字二字、  
は漢字一字で答えること。

問九 ——線部7「外界の他者と接するのは、女性が圧倒的に多いのだと思う」とあるが、筆者がどのように思うのはなぜか。その理由として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 男性が日常的に接する人は多くの場合、相手との関係性が固定している人たちばかりだという点で真に「外界の他者」とは言えず、むしろ女性が日常的に接している相手の方が、その関係性において多様性に富んでいると言えるから。  
イ 男性の方が、日常的な交友関係を特定の集団内に限定しがちであるという点において、真に「外界の他者」と接しているとは言えず、むしろ女性の方が積極的に「外界」に出て多様な「他者」と接する機会を多く持つようとしているから。  
ウ 男性の方が、接する相手をえり好みして気の合う人としか付き合わないという点において真に「外界の他者」と接しているとは言えず、むしろ女性の方が子育てや家事の必要性から多様な「他者」と接する機会を多く持っているから。  
エ 男性が日常的に接している人は多くの場合、自分よりも地位が下の人たちばかりだという点で真に「外界の他者」とは言えず、むしろ女性が日常的に接している相手の方が、その上下関係において多様性に富んでいると言えるから。

問十 ——線部8「嫌悪というより、恐怖のゆえだろう」とあるが、なぜ「恐怖」だというのか。その理由として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 場面に応じて日常的に顔を使い分けているような人物の内は、常識的な理解を超えるものであるから。  
イ ある人物からまったく正反対の性質があらわれることは、理屈で説明できるようなことではないから。  
ウ 楽しい話しながら飼い犬に暴力をふるうような人物に対しては、寛容な心を持つことはむずかしいから。  
エ 表と裏をはっきりと持っている人物と接すると、誰の心にも相反する二面性があることを意識させられるから。

問十一 ——線部9「私はそのような人物の登場する小説のほうが、好きだ」とあるが、筆者はなぜ「そのような人物の登場する小説」が好きなのか。「そのような人物」の指し示す内容を明らかにしつつ、一〇〇字以上、一二〇字以内の一文で説明しなさい。

問十二 この文章を大きく二つに分けると、どの段落から後半がはじまるか。その段落の最初の五字をぬき出して答えなさい。

平成二十八年 度 一 般 入 試 ① 国 語 解 答 用 紙 ( 1 )

受 験 番 号

氏 名

	①
	②
	③
	④
	⑤
	⑥
	⑦
	⑧

解 答 用 紙 2

合 計

◆ 右のらんには何も書かないこと。

問 一

問 二

問 三

問 四

問 五

問 六

問 七

問 八

問 九				
自 分 に 気 が つ い た か ら。				
80	60			

問 十

問 十一

